

SAMPLE 試読 お試し



SM小説

あんぷらぐ

荒縄工房

医才り愛

かげりあい

SAMPLE 試読 お試し



SAMPLE 試読 お試し

<https://unpluggednovel.jp/>

PixAI

S
M
小説

翳^{かげ}
り
愛

あんぷらぐ著

荒縄工房・発行

SAMPLE 試読 お試し



本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐ

SM雑誌に「仲ゆうじ」名でSM編集の仕事に携わる。九〇年代二〇一一年「荒縄工房」より伝奇SM小説などを発表。二〇一九年「あんぷらぐ」に改名。東京在住。

SAMPLE 試読 お試し

目次

千紗がわたしに	7
古民家カフェとして	3
だけど、わたしの想像の	7
朝、トイレに行っても	1
面倒すぎて	145
気持ちいい？	182
出して	214
ヒーリング系のBGMを	45
見に行くと	273
変態姉妹が	311
一番暑い時間	348

SAMPLE 試読 お試し

では、みなさまに	3
日曜日となりました	3
気が遠くなるような	2
わたし、友和君が	5
新しい年	5 5 2
ああああ	5 7 2
奥付	6 2 4

SAMPLE 試読 お試し

千紗がわたしに

千紗がわたしに口紅を塗ってくれています。その白い指。微かに頬に当たる彼女の息づかい。そして肌の温もり……。

「どう？」

鏡の中で、千紗が微笑みました。彼女は鹿の子絞りの暗い紺の浴衣。わたしとは四つしか違わないのに、落ち着いています。もっと派手なかわいい浴衣にすれば、と提案すると「だって、まだ今年のことだから」と言うのでした。

兄の死。兄の嫁としてこの家に来た千紗は、もうこ

SAMPLE 試読 お試し

こにいる理由はありません。

納骨をすませたら、びっくりしたことに夏も盛りになっていました。兄と父母が突然事故で亡くなったのは、まだ春というには早い三月初旬のこと。葬式の間、ずっと寒くて震えていたというのに。あれからずっと体も心も冷え切ったままだったような気がします。

うつすら汗をかく自分がいます。

「別人みたい……」と、わたしは明るく答えました。
実際、別人です。

「すてきよ」

千紗の微笑みは勇気をくれます。

わたしは今日、はじめてお客様の前に愛子として立

つのです。

自宅を改造した古民家カフェ「貴紗良（きさら）」。
それは兄が残したもの。ほかにも借金や保険金やその
ほか、いろいろな面倒なことも残したのですが、それ
は千紗が気丈に解決してくれました。

店を開けましょう――。

千紗は納骨した夜に、そう言っただけです。

「え？　本気なの？」

「ええ。でも、その代わり、あなたにも手伝ってもら
うわ」

「だめ。むり」

人前に立つことなどとうていできません。兄と違い、

醜く、鈍くさいわたしは、どんな仕事も長続きせず、特に他人とうまくやることができず、なにもしないままにこの家の隅で三十歳になつていたのです。

「愛子ちゃん。人間としてあなたを認めているの。愛子ちゃんも一人で生きていけるようになりなさい。じゃないと……」

義姉は言葉を飲み込みました。恐らく「ここを出て行くこともできない」と続くのではないかと思つたのです。

「お姉様」

わたしはその夜、千紗の膝で泣きました。それは懐かしい母のような感触。そして兄が愛した女性の肉体。

普通の女性なら、わたしがこんなことをすれば「気持ち悪い」とか「どけよ！」と言うでしょう。

でも千紗は受け入れてくれました。

彼女のためにも、がんばらないといけません。

メイドの服を千紗が取り寄せてくれました。彼女の思いのこもった服なのです。ローライズの下着をつけ、腿まであるストッキングをはきます。

ですが裾が長く足はほとんど隠れてしまう黒いワンピース。不格好なわたしの体形を隠すために考えてくれたのだと思います。

お店の雰囲気合うクラシックなメイド。

胸元に白い布で切り替えがあり、三つのボタン、肩

にはフリルがついています。スタンダードカラー。臍脂色のタイ。髪は胸元まである黒髪のウィッグ。大きめの白いメイドキャップで、なんとかかっこうをつけます。

鏡の中のわたしは、まったくの別人。

「うそだろ！」

開店して最初のお客様は男二人でした。わたしはうつむいて、水の入ったグラスを出し、注文を待ちました。

彼らはわたしの顔をマジマジと見るのです。

「おまえ、友和だよな」

聞きたくない名前。わたしは千紗が用意してくれた

ネームプレートを、彼らに示しました。腰に巻いた白いエプロンについているのです。

「愛子です」

「ふざけるなよ。化粧したってわかるぞ」

「ずっと引きこもっていたって聞いたけどな」

すっかりおっさんになっている彼らに気付かなかつたのです。同級生。いまから十年以上も前にちよつとだけ行っていた学校。なんにも思い出はありませんが、彼らとは幼稚園からずっと一緒だったのです。

普通の子どもだった時期があつたのです。

「だけど、よかったよ、とにかく」と一人がニツコリと笑ってくれました。

「まあ、そうだよな」ともう一人もうなずいてくれました。

「そういうことだったのか」と彼らは驚いたままです。「ご注文はお決まりですか？」

わたしは何百回と練習したセリフを言いました。

「アイスコーヒー」と彼らが言い、とりあえずいきなり帰らないでくれて、ありがたいと思いました。

奥にいる千紗にオーダーを伝えました。

「ハラハラしたわ」

アイスコーヒーを用意しながら千紗が笑いました。

「怖いです」

「大丈夫よ」

初日は、あつという間でした。昼には何組もがランチにやってきました。そこにも同級生やその家族がいました。

「すごく、かわいいじゃない」

女子の同級生に言われました。それはとてもうれしいことでした。もう、名前も忘れてしまっていますけど……。

「これからは、愛子って呼ぶね」

「ありがとうございます」

何百回と練習したので、お礼もよどみなく言えます。裏は雑木林。近所には小高い山もあり、小川もあり、田畑もあるものの、住宅地が急激に広がったこともあ

って、知らない住人が増えていました。

その人たちにとっては、サイクリングコースの途中でもあり、自転車で気軽に立ち寄ることのできる「貴紗良」は便利なスポットになっていました。

兄の死によって、そこが閉鎖されるのではないかと思っていた人たちは、わたしが何者かなど、どうでもいいことでした。店が開いたこと、美しい千紗が引き継いでいることで、みな安心してくれています。

朝は八時から夜は七時まで。掃除が終わると八時頃になります。

遅い夕食はわたしが担当します。残りもので作る料理を千紗に教わりました。

「明日も暑いらしいから、冷たいものが出るわね」と
千紗。

「わたし、気付かれました」

「え？」

「同級生が来ていたんです」

「そう。なんか言われたの？」

「別に」

「よかったじゃない。この店に、あなたみたいなきれいな娘がいるなんて、驚かれていると思うわ」

「そんな……」

わたしほど醜い者はいないのです。今日のことが、とても恐ろしいことのように思えてきました。みんな

に知られたのです。

あいつ、オンナになっていたぜ――。

バカなんじゃね？――。

気持ち悪いやつだと思ったけど、ここまで変態とはなあ――。

みんなにウワサされているような気がします。潰されてしまいそうになります。また部屋に閉じこもりたくなってしまうです。だけど、いまはダメ。それに千紗がいてくれるのです。

わたしのお姉様。

「明日もがんばろうね」

「はい」

明るく返事をしたつもりでしたが、今朝ほどの自信はなくなっていました。

子どもの頃に見たフランケンシュタインの映画。モノクロですが、村人たちに追われて悲しく叫ぶ怪物に、涙が止まりませんでした。

あれは、わたしだ、と思ったのです。

なにも悪いことはしていないのに。

夜中に松明を持った人たちがここに押し寄せてきて「化け物を出せ！」と義姉に迫ったら……。

雑木林に逃げるのですが、追っ手は足の速い猟犬の群れをけしかけ、わたしはその鋭い牙に足をズタズタにされるのです。

「こんなところにいやがったか」

同級生たち。松明に照らされて赤鬼のような顔をしています。

「ぶっ殺す」

みんなが猟銃をわたしに向けるのです。

店を開くと決めてから、そんな悪夢をよく見るようになりました。

ですが、立ち仕事に疲れ切ったのか、気付くと朝で、悪夢は見なくてすみしました。

「お姉様、おはようございます」

少しでも早く起きることができて、湯を沸かしているとパジャマ姿の千紗が起きてきました。

すっぴん。そしてパジャマを突き上げているふくよかな乳房。

醜いわたしの部分がうごめき、固くなっていくのです。

ああ、嫌。こんな自分が恥ずかしいです。

「おはよ！」と千紗はおどけて言います。「さすがに年ね。起きられなかったわ」

「わたしがやりますから」

紅茶を入れ、トーストを焼き、目玉焼きを作りましたが、それが限界でした。

「野菜もとらなきや」と千紗は手早くサラダを作りました。とてもかないません。

この店、兄の残した唯一の収入源を再開させると決めてから、わたしは千紗から特訓を受けました。接客だけではなく、コーヒーなどのドリンクの作り方から軽食まで。

「カフェの学校に行くべきよ」

千紗は何度かそう言ってくれましたが、頑なに拒絶し続けました。学校は嫌。ここは店である前にわたしと兄の世界だから、そう思うことでなんとか踏みとどまっていられるのです。

自転車に乗って駅まで行き、そこから電車を乗り継いで調理学校へ行くなんてムリです。

「せめて、運転免許は取らない？」

だめです。見知らぬ教官と二人だけで教習車に乗ることが、恐らく不可能です。そもそもわたしのような者は、自動車を運転するべきではないのです。人をはねたりしたら……。

「やめて！」

千紗が懇願します。くりつとした肩が浴衣から出ています。縄がぎつちりと彼女にかかっています。腕が背中にひねりあげられて、幾重にも縄に絡まれて、大きな結び目になっているのです。

「どうして、こんなことするの？」

「お姉様」

わたしは落ち着いていました。最初の嵐は過ぎたの

です。

ドキドキは止まりませんが、ボウツとなるほどではありません。

「どうしてわたしを裏切るの？」

「なにを言ってるの。愛子ちゃんを裏切ったことなんてないわ」

「あの工事の人と、なにをしようとしていたの？」

「なんにもないわ！」

目を開くと、お店は昔のとおり。

浴衣姿の千紗は、微笑みながらコーヒーをカップに注いでいます。

「いいわ。ゆつくり、世界を拡げていけば」

奥付

お読みいただき、ありがとうございました。

二〇二三年五月刊行 第一版

著作権 あんぷらぐ（あんぷらぐど）（荒縄工房）

荒縄工房の情報は下記サイトへ

●ブログ「荒縄工房」

●ホームページ

●荒縄工房 S M 研究室

●今日も上機嫌ってわけないだろ

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。

SAMPLE 試読 お試し